



巻頭言

## 精緻な感性の「ものづくり」を

荻野和己\*

“The making of things” through delicate sensitivity

Key Words : The making of things, sensitivity, rain, color

21世紀に入って、はや1年が過ぎ去った。この1年、歴史的に見て、特筆に値するきわめて大きな出来事が国内外において起こった年でもあった。

国内では、改革を旗印とした小泉内閣の誕生であり、国外では2001年9月11日アメリカ中枢同時多発テロとそのテロ・グループに対する戦闘行為である。特に、後者は20世紀のイデオロギー対立消滅後の新しい対立、すなわちサミエル・ハッチントン教授のいう「文明の対立」を思い出させる。

ハッチントン教授によると、現在、世界の主要な文明は西欧、東方政教会、中華、日本、イスラム、ヒンドゥー、ラテンアメリカ、アフリカの諸文明であり、今後これら各文明間に20世紀と違った形式の対立の生じることを予想している。

ハッチントン教授の文化および文明の観点からすると、日本は文明と国家とが一致し、共通の文化を分けあっている国のない孤立した他に例のない文明であるといわれている。

また、このことは文化の一環でもある「ものづくり」においても、わが国がユニークな状況にあると考えられる。このように、わが国の文化、「ものづくり」の独自性はわが国土の地理的条件、自然環境下において数千年という長い間にはくぐまれてきたものである。

わが国の「ものづくり」の独自性は、古来より有する感性に外来文化を吸収、消化して洗練されてきた。

特に江戸時代の二百数十年にわたる鎖国は世界史上例を見ない長い平和の期間を生み、「ものづくり」の爛熟に十分な時間を提供したことになる。

このような江戸時代に至るわが国の「ものづくり」の爛熟と「ものづくり」への精神性の確立は明治の近代化にとって極めて強力な基盤を提供した。また、近代化にあたって、わが国は西欧諸国のように革命的な激動を経験せず、その結果、伝統的な文化の統

一性が、維持されながら近代的社会を構築するのに成功した。このことは近代化の進行にきわめて効果的であったと見られ、20世紀中頃において、すでに欧米諸国に追いつき追い抜く「ものづくり」を有するに至ったのであると考えられる。

天然資源の少ないわが国にとって今日の繁栄を維持するためには「ものづくり」によらねばならないとよくいわれる。そのため常に努力を重ね、世界においてトップクラスの座を保たねばならない。これには国家の存亡がかかっているといつて過言でない。「ものつくる民」とも「職人国家」ともいわれる日本人のもつ「ものづくり」の伝統を我々は誇りにすべきであり、守っていかねばならない。

しかし、かつてわが国の「ものづくり」が欧米諸国の「ものづくり」に追いつき、時には追い越したように、現在わが国が東アジアの国々より猛烈な挑戦を受けているのも事実である。では、今後、我々はどのように対応していくか。長年にわたり独自の文化を有してきたわが国の木目細かな「ものづくり」が今後の「ものづくり」を考えるに当たって1つのヒントを与えてくれるかも知れない。

ユーラシア大陸の東方洋上はるか南北3000Kmに及ぶ日本列島は、温和でしかも変化に富み四季折々極めてデリケートな変化を示す。この微妙な変化は色彩にもあらわれ、実に豊かな色名がある。ある識者は、その豊かさに茫然とするほどであると形容している。

染色の世界でも四十八茶、百ねずみといわれ、48種類の茶色があり、黒と白の中間色(ねずみ色)に100種類もの言葉があるといわれている。色名の豊かなことは自然界にそれらの色彩が存在し、日本人にそれを識別しうる極めて鋭敏な感性的精緻さを有していたことにある。

また、雨の多いわが国の四季折々の自然の変化は雨の恵みによるものであるが、この雨の呼び名についても450通りもあるといわれ、このように雨を呼び分けた民族は他にないであろうといわれている。

木々の葉の色、風の音、雨の降り方に微妙な自然の変化を感じ取った日本人の精緻な感性を思い起こすことが望まれる。この特色を生かしこれからの「ものづくり」の展開にとって大いに役立てて行かねばならないと考える。



\* Kazumi OGINO  
1929年1月4日生  
昭和28年大阪大学工学部冶金学科卒業  
現在、大阪大学名誉教授、(社)生産技術振興協会理事長、工学博士、経済学修士、高温界面化学、産業技術論  
TEL 06-6716-4644  
FAX 06-6716-4644